

經濟論叢

第七十九卷 第一號

經濟政策学の方法論……………	豊崎稔	1
ケインズにおける投資概念の解体……………	吉村達次	21
一般労働組合の成立過程……………	前川嘉一	43
——ロンドン・ドック・ストライキ（一八八九年）を中心として——		
個人と組織……………	降旗武彦	68
——ハーバードの The Functions of the Executive の 検討を中心として——		
社会主義計画化と国民經濟バランス……………	高昇孝	90
生産的労働と交通労働……………	崎山一雄	108
堀経夫博士還暦記念論文集		
「古典派経済学の研究」をよんで……………	出口勇蔵	128

昭和三十二年一月

京都大學經濟學會

堀経夫博士還暦記念論文集

『古典派経済学の研究』をよんで

出口 勇 蔵

序

京都大学経済学部卒業生のうちで、経済学史の研究と教授とにおいてわが国で顕著な業績をあげられた人として、堀経夫博士の名を失することはできない。昨年の四月に博士が還暦をむかえられたことを記念して、現在博士ともっとも近く接しておられる大道安次郎と久保芳和の両教授の御尽力によって、昨年の九月に、一冊の記念論文集が出版せられた。題して『古典派経済学の研究』といい、収める論考は実に一七編に及び、そのいづれもは、博士の研究および直接の指導によって、経済学史の研究に深く心を寄せて活躍する人たちの労作であり、附するに博士の年譜・著作目録、ならびに博士愛蔵の蔵書目録を以てする、実に四一六頁の大冊である。わが国において、経済学

史の研究が経済学界において占める位置の大きさが——あえて深さとはいわぬ——外国にその例を見られぬほどのものであることは、すでによく知られているところであり、そのために、昭和三十一年度にも、わが学界は経済学史の研究史に相当多量の研究成果をみのらせたのであるが、その中でも、この記念論文集は目立った存在であって、その成立の由来を考えると、わが国の学界における一つの金字塔として、これは後の世に永く残るにちがいない。堀博士の還暦を祝賀し、あわせて御加餐をいのるの微意から、ここにこの論文集の読後感をしるして、学界の美筆を世にたたえようと思う。

—
この論文集の特色といえば、つぎの点があげられる。第一

に、ここには、堀博士の研究テーマにふさわしく、古典派ことにスミスとリカードウとに関する研究論文が多く、その他はスミスを準備するイギリスの自由貿易論の討究（小林昇教授）であつたり、スミスの同時代者ベンサムとジェヴォンズを結ぶ思想の系譜をたずねるものであつたり（久保芳和教授）、アメリカにおける古典派の代表、W・H・サムナーの紹介であつたりする（大道安次郎教授）。なかには、無理に古典派と結びつけようとした筆者の努力がしのばれるものもあつて、われわれの微笑をさそうのである。第二に、ここには、論文集としては異例のことだが、リカードウの遺稿で、三年まえにはじめてスラッファ版のリカードウ全集第四巻において発表された未完の論考“Absolute value and Exchangeable Value”の、玉野井芳郎教授の手になる翻訳の一文が収められていることである。訳の出来ばえについていうのではもとよりないが、この収録は、日本での経済学史学界が、翻訳とも研究ともつかぬ種類のものであつた昔の水準を、くりかえして示めすことになるのではないかと、いぶかる人もあるかもしれない。しかしこの不審はあたらない。なぜなら、この収録こそ、いま堀博士を中心としてすすめられている、スラッファ版リカードウ全集の完訳という、世界にはこるべき大事業が、その巨案の一端をここにのぞかせているのだからであり、このことは、絶世の美人をかいまみるときのように、われわれに大事業の前途を祝福しその目出度い

完遂をこいねがう気持をかり立て、あわせて、堀博士の御精進と御加餐とを祈念するの真情を呼ぶよすがとなつてゐるからである。この意味で、この収録はかえつてこの記念論文集にふさわしい仕業であつたというべきである。第三に、ここには、堀博士の薫陶を受けていま実業界の第一線に活躍している平林忠雄氏のリカードウの通貨論の一研究がのつてゐる。氏は學術論文を師の記念に投ずることによつて、報恩の志をとげようとするとともに、金融界に雄飛しながら學術の難路にわけ入つたりリカードウを、みずからの生活と比べつ、しのぼうとしてゐるのである。この一文は、その論旨の展開、行論のあやつりにおいて、専攻学者のそれに決して劣りはみせてゐない。堀博士は一見、世事にうといことを誇りがちな純学究はだであるようだが、この教え子のあることをしめされたことによつて、その研究と社会実践とにあかるい御人徳を笑証されたわけであり、これも亦、この論文集から学びとれる一つの教えであるといつてよい。とともに、専攻学者の論文が実業家の余技と比べて、特に秀でているとは必ずしもいえないことを知るのだが、そのときわれわれは他人ごとならず反省しないわけにはゆかないのである。それは研究者の意憤のためか（これについては後にもふれる）、それとも研究者の生活上の悪条件のためだろうかという風に。

さて、この論文集についてはわたくしの知るかぎり、行沢健

三教授の筆になる、各論文の内容についてのくわしい紹介を兼ねた周到な批評もすでに公けにされていることであるが（『経済学究』第十卷第三号、昨年十月発行）、ここでも同様の読後の感想をつづりたい。あらかじめおことわりしておきたいが、寄稿者の大部分の方とは学会その他ですでに顔なじみでもあるので、以下の感想をのべるにあたって、齒に布きせることをしなぬ。時に礼を失するの誤りをおかすことがあるかも知れぬ。請う、寛容を以てゆるされよ。

二

スミスに直接関係のある論文からとり上げよう。

白杉庄一郎教授「アダム・スミスの市民社会成立史論」

スミスの「自然進歩」 *natural progress* のスミスの経済学体系中の意義および経済理論との連関は、かれの経済学を科学の地平で考えてゆくと、その概念はたんに合理的に構成された理論的・歴史的な系列にすぎないものとなって、実証の試煉にたえる力に乏しく、経験科学の指導的な概念としては適格性をもたぬもののようにみえる。しかしかれの体系を歴史哲学の上にのせてみると、この概念が、「自然秩序」とともに、歴史と理論政策との全体を一貫して古典派経済学の特徴をきわ立たせていとの中心的な意義をもつものであることが、わかるはずである。白杉教授の論鋒は、もっぱら、実証的な経済史の立場から、「自

然進歩」と市民社会成立とのギャップのえぐり出しにそがれる。そしてヨーロッパの史実スミスのいう不自然な発展のコースを辿ったということをくりかえし指摘され、われわれが現在スミスから学びとるべきことは、不自然な発展のコースに対するスミスの正確な史的認識であった（七一頁）とされる。この間、教授は歴史的事実の意義の相対性に注目され（六七頁）、経済史を考えるばあいに外国貿易を抽象することの抽象性を強調し（七〇頁）、それに関連して、大塚久雄教授のスミスの発展論に対する批判がおこなわれている。これらの論点は白杉教授に固有な論拠にもとづいているものだから、読者には大きな興味があるところであろう。しかしながら、スミス体系の解釈としては教授の批判は的がはずれていると、思わざるをえないのである。問題は、一八世紀の歴史哲学と経験科学との結びつき、したがって、スミス経済学における合理性と実証性との特質にあるのであるから、歴史哲学の裏づけをすてて、実証的な経済史からスミスを論難しても、スミスにとってあまり痛くもないであろう。それどころか、スミスの「自然秩序」および「自然進歩」の概念がもつ方法的核性が見うしなわれることになりかねないのである。もし、スミスが中世以後のヨーロッパの経済的発展のコースを正しくとらえているとするのであれば、スミスがどういう歴史的資料にもとづいてその正しい認識に達したのかということを、実証的経済史の発展のあとをた

どることによって、それこそ実証的に明らかにされるのでなければならなかつたはずである。スミスの理論を歴史哲学と関連させて説くのだといへば、それは前科学的な態度だという人もあろうけれども、歴史哲学の命題をいきなり科学的分析の地平にもちこむことに對してはもとより批判的でなくてはならないが、科学的分析の背後にあってそれをみちびく方法的な概念として歴史哲学の命題を位置づけることは、スミスの理解にとつて真に必要な思想である。この両者を混同して、いたずらにスミスにおける実証性の不足を論難することは、わたくしのとらざるところである。また白杉教授は論文の最後で、スミスの主張とは逆に、アジアの社会こそ「自然進歩」をとげたといえないかという主張をなしておられるが、この点についても亦スミスによつてかたがたに証明されているところなのであるから、教授の主張は実証のうらづけをとまなつて、おこなわるべきものであろう。總じて、教授の所論からは、歴史学派的な実証性の要求があまり強すぎるのが感じられ、そこに不満をもたざるをえないのである。

大河内一男教授「アダム・スミスにおける『浪費』と

《節約》」

スミスについての *virtues* である大河内教授の、久しぶりにスミスをさげの登場である。スミスの経済倫理が当時の階級構成の反映とされることは、わが国ではすでに教授の研究のお

かげで、常識になつてゐるが、ここではこの常識に更に一步ふかく分析のメスを加えられようとする。すなわち、特権階級の『浪費』生活が指摘せられ、「働く貧民」には『勤勉』と『節約』との徳がわり当てられ、かれらは「中等ならびに下層階級」として一括されていると考えるのが常であるのだが、教授はこの一括的な名称を更にかけて、ブルジョアジーには「節約」の徳を、そして、後にプロレタリアートとなるべき貧乏人には「勤勉」の徳を、指示しているものと解しようとするのである（一二頁以下）。けれど、ブルジョアジーはスミスの當時にはすでに相當に資本を蓄積し、『節約』しうる余裕に恵まれており、また『節約』によつて資本を更に蓄積するのに自分の利益をみだしてゐたからである。ところがこれに反して、プロレタリアートにはその余裕がなく、『勤勉』こそがこれらのモラルでなければならなかつたわけだから、というのである。

これは注意のゆきとどいた分析であるといわなければならない。しかしながら、『働く貧民』とスミスが書いている階層が、後世のプロレタリアートにだけ限り、『勤勉』の徳をかれらだけに歸し、『節約』の徳はかれらから離してそれをブルジョアジーにのみ認めようとするのは、十分納得しかねることであらう。真実には、スミスのばあいにもなお、第三階級と第四階級との分化は表面にあらわれず、前者に属する雇用者は後者とと

もに労働しつつ資本の蓄積に乗りだし、後者も亦、労働と節約との二面をかねをなえていた時代であり、スミスが書いているように、「中等ならびに下層階級」として等しく取り扱ひえたとみるべきではないだろうか。

なお教授はマンドヴィルからスミスへの展開において「自愛心」のはたしている役割のちがいを正しく指摘しておられるが、この展開について、ルカーチが『若きヘーゲル』の中で、マンドヴィルには「利己心の主観的止揚 *subjektive Aufhebung*」があったのに対して、スミスやヘーゲルにおいては「利己心の客観的止揚 *objektive Aufhebung*」があったと述べていることが、われわれには参考になるだろうことを、しるしておこう。

またこれは教授の問題には直接関係のないことも知れないが、『節約』の倫理性についてわたくしに気がついているひとつのことをここに示すことをゆるされたい。いわゆる資本主義の精神とスミスの経済倫理とのつながりの実相は、いまだに明瞭ではないのだが、それについて注意してみるべき点があると思えるのである。それは、資本主義の精神としてウェーバーが語るの、一七世紀までの文献によってであって、王政復古の世になり一八世紀に入ると、イギリスに関するかぎりは、エトスの背後の支柱となったと考えられる宗教性は姿をひそめるに至ることである。マンドヴィルをはじめバトラー、ポープ、スミスとつづく経済倫理の展開において、宗教的緊張

感が次第に稀薄ないし必然的でないものに転化してゆく。そしてそれは、資本主義経済に特有な制度が部分的に漸次整備されはじめて、『勤勉』にも『節約』にも、主体的決意に宗教的緊張感の介在を必要としない、客観的に存在する新しい経済制度に対する順応が、やがて経済倫理の実践となるという段階になってゆく、ということの表現でなくてはならないであろう。一八世紀に入るにつれて新興階級から宗教的緊張感がなくなることにについて、トニーはつぎのように書いている。読者の参考に供すべく、ここに長い引用句をはさむことをゆるしていただく。

「王政復古になって、清教徒の厳格さに対する反動から、世の中がまた放縱に流れたことは、非常によく知られた陳腐なことからである。(中略)あまりにも骨の折れた理想主義『清教主義』という訓練のこと——引用者』があてにならぬものとわかったとき、かれら〔商売人たちのこと——同上〕は、酒神バカスの信者どころか、それよりもっと搾取的である御利益あらたかな神様の信者になって、ヤレヤレと思う解放感を祝ったが、それは、金もうけをしたといっは喜び損をしたといっは大騒ぎする熱狂の中へますます深くとびこんでゆくことによってであった。」(R. H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism*, 1938 ed. P. 248.)

ここに商売人と訳したのははかならぬ第三階級であり、かれ

らの節約、すなわち資本の蓄積、更にいいかえれば金もうけは、王政復古後にあっては、清教徒のエートスとは無関係に追求されたとみるべきであって、それは節約の可能性が世俗生活において客観的にあらわれてきたことに対応すると考えてよいであろう。そして、一八世紀の清教運動といえはそれはメソジスト運動であって、この運動においては、いわゆる資本主義の精神として特色づけられるべき積極的な経済倫理とはほしくなっていたのである。この点、大河内教授の論説とは直接には関係はないが、参考資料としてここに書いておきたいと思う。

さて、スミスに関する論説は、右のほかに、

楠井隆三教授「国富論における生産的労働と不生産的労働について」

高木暢哉教授「スミスにおける通貨主義と銀行主義」

入江獎教授「A・スミス・再生産論に対する一考察」

がある。楠井教授は、マルクスが取り上げて以来、非常に有名になったスミスにおける労働の二区分の問題を理論史的に研究しようという立場から、きわめて忠実に解説されているのであって、初学者むきの論文であり、それだけ専門学徒には喰い足りぬところがある。この問題は、現在とり上げようとすれば、肉体的労働と精神的労働との区分およびそのよって来たる所以と関連させずしては、周到な研究とはなりえないであろう。

高木教授の論文は、論争の種子を蔵している。すなわち、ス

ミスの中に通貨主義の起源をみとめる新庄教授や通貨主義と銀行主義の両者の共存を主張する高橋泰蔵および杉浦治七教授の所説に反対して、高木教授はスミスの貨幣論が銀行主義の立場から首尾一貫的にとらえられることを主張せようとするからである。わたくしはこの方面には暗いので立入って批評する資格をもたないが、議論のすめ方がエッセイ風であって、原理的な根拠からの解明に乏しいと思えたのは、素人よみのためであらうか。

入江教授の論考は周到な準備の末に執筆されたということが一読して了解される力作である。スミスの再生産論におけるマ+Mのドグマについて、マルクス説と中山説とを対比させながら、このドグマのスミス体系内部における内在的意義に焦点をしばって、鋭利な分析がつづけられ、切りこみの鋭さに感心させられた。しかしわたくしには、教授の立場が中山説に近く、スミスの価値論の正しい理解が根底にすえられてないために、折角の分析もしかるべき論拠において実をむすんでいないように思われてならないのである。

三

スミス以外の古典派に関する論考としては、

平林忠雄氏「リカアドウと貨幣制度」

越村信三郎教授「シスモンディの再生産学説」

中野正教授「一八一九年の恐慌とリカアドウ」

豊倉三子雄教授「マルサスとリカアドウの恐慌論」

末永茂喜教授「チャーマーズの恐慌論」

があげられる。平林氏の論文の意義については先にのべたが、それ以外の各論文について短評を加えてみる。

越村教授のものには論作の問題意識が明瞭でないうらみがあつて、そのために、解説というべきものになっている。フランスの現実との関連に全くふれられていないのにも、多少氣になつたことである。

中野教授の論文は、準備も豊かにとつた力作であつた。

一八一九年の恐慌についてのリカアドウの二つの言及を手がかりにして、リカアドウのいう「資本の不充分的し不適當性」なることばをとり上げ、それを分配の三範疇の相関々係から説明し、もつてリカアドウの立場を明かにされようとするのだが、リカアドウの議會での發言を手がかりにするという構論そのものに清新の氣がみなぎって、興味ぶかかつた。

豊倉教授の所論には緻密な分析がうかがえて教えられるところが多かつたが、問題のとらえ方に特色がみいだしたい。論理的展開に表現が平行してついでゆかない思ひを時にさせられたのも、一考を要する点ではあるまいか。

末永教授のものはわが国では珍しい紹介であらう。しかし珍しいだけに、チャーマーズの全体像との関連において、恐慌論

を展開された方が、読者には親切ではなかつたらうか。又その方が、リカアドウ当時の經濟学者の實踐的立場の実相が一層よくわかつたことだらうと、望蜀の感をもよおすのである。

その他、本巻には

小林昇教授「十八世紀初頭の自由貿易論」

三谷友吉教授「ウィクセルのリカアドウ批判について」

久保芳和教授「ベンサムとジェヴォンス」

大道安次郎教授「經濟學者としてのW・H・サムナー」

がある。小林教授のものは、教授が多年手がけられているスミスへの系譜を辿る研究上の一章であつて、一七〇一年刊行の *Considerations on the East India Trade* を、既成の評価から自由な立場でたどるとき、いわゆる「トリリー・フリー・トレード」との直接の接続はみとめられないと、アシュレイを批判し、自由貿易論が産業資本の立場に立つて展開された所以をのべられる。わが国の學者の自由独立の研究境地の一つ——一つというのはわが国の研究水準としては他の立場からの境地もまたあげられるから——を實証するものとして、教授の他の論文とともに、貴重な力作であらう。

三谷教授のものは、靜態論的な立場から行われるウィクセルのリカアドウの機械論への批判は正しくなく、その批判は動態論の立場で行わるべきことが主張されている。が近代經濟學に暗いわたくしには、これについて批評の資格はなさそうであ

る。

久保教授のものは、興味ある問題をふくんでいる。すなわち、いわゆる「経済学における近代」の先駆者、ジエボンズにおける主観主義的思考をスミスの同時代者ベンサムの中に発見、追求しようという努力がおこなわれているからであって、人間観・功利主義思想・効用遞減法則・価値論・時差説などについて、問題の提出が行われている。だがおしやかな、素材の提出におわり、その理論的および歴史的意義の追求はここで行われようとはしないのである。

大道教授のものには、普通社会学者と思われるサムサアの若年のころの経済学的研究が紹介されていて、アメリカにおける古典学派の命脈を辿る里程標の一つが提示されている。

さて以上のはかに、われわれは注目すべき巻頭論文をみいだす。すなわち、

豊崎稔教授「古典派経済学者の研究方法」

がこれである。この論考はわれわれ経済学史を研究する者に対する警鐘としてかかれていただけに、わたくしは若干たち入ってその内容について考えてみることはならない。

題して古典派云々とするが、それは後にいうように、一つの例示としてかかれてあるにすぎない。問題はわれわれの「研究方法の欠陥」を指摘して、われわれを反省させることにある。経済政策の専攻家から反省の機を与えられたことに對して、わ

れわれはまず深い感謝をささげねばならぬ。なぜならば、他の専門研究者との交渉をもつことがすくなく、したがって、われわれの研究に対する批判に接する機会にめぐまれないでいると、小成に安んじ、本来の研究目的そのものを打ちわすれて、研究がなぐさみに化する危険があり、ことにわが国の社会科学のあり方からして、その危険は相当大きいと思われるからである。

さて、教授がわれわれの欠陥といわれるものは何か。それはこうである。本来、経済学史は現代経済学の補助科学であって、現代経済学の理論体系を前提するものであるのに、経済学史家は多く、それに対する反省を欠いており、そのために、過去の理論や命題の系譜を問うことに終始している。過去の理論がどんな問題意識をもち、どんな仮定に立ち、どんな論理で形成されているのかについては、ほとんど関心をもちたない。だから、経済学史は一分科々学にならず、いたすらに *Review of Economic Doctrines* という程度のもので以上には出ないのである。(六—七頁)——この批判に対する反論を直ぐ出すことをひかえて、つぎに、どうすればこの欠陥とされるものがのぞかれるのかという問題について、教授が指示されるところを聞く。教授はいう。たとえば古典派、ことにリカードをみると——ここでわれわれは本論文の表題とかかわりうる幸福をもつ——かれの理論形成の底には、「実践的問題意識」があったのだが、そのことが多くの学史研究者には忘れさられているとい

うことから、上記の欠陥とが現われているに相違ない。だから
学史家も亦、マックス・ウェーバーに遠慮せずに、実践的意欲
を確立するところがなくてはならない。(八一〇頁)——そして
この批判と忠告とは、マルクス経済学の側に立つものにも、
近代経済学の側に立つものにも、等しくあてはまる、といわれ
ている。

さて、われわれ経済学史の研究にたずさわっている者は、上
の批判をどう受けとり、この忠告にどのような反応をしめすべ
きであるか。

だいたい、教授の批判は、単に経済学史研究者に対してだけ
ではなく、日本の経済学者一般に対する批判であると思える。
そして、ただこの論文集への寄稿として形をととのえる意味
で、特に学史学者に批判の鋒先がむけられたというだけのこと
らしい。そこで、行論中、学史学者にむかってだけいふべきこ
とと経済学者一般にむかっていふべきことが入りまじって
いるのが、時に見いだされるのである。がそれはさておくとし
よう。小稿の最後にのべるように、現代日本の経済学史または
経済学説史にはある種のひずみがあることは否定しようとは思
わない。そのひずみは、注意しないと、日本における経済学の
発達に対して、大きな禍因となることでもあらうところのもの
である。ために、ひとは目下刊行中の『経済学説全集』の各
巻についてそれを吟味されるとよからう。しかしながら、豊崎

教授の批判は少し粗大にすぎはしないか。西欧の経済学説の手
にあり、紹介のみを以て学史の本分は尽されると考えた、古い立
場——この立場が今なおとをたたぬことも事実である——
は、学界の第一線からは姿を没しているはずである。経済学に
における実践意欲の方法論的重要性、したがって、経済学史研究
における実践意欲の意義の基礎認識、——こういうものは、
現段階の学史研究者にとっては、実に常識にぞくしているとい
ってよい。したがって、教授が例証とされるリカアドウについ
ても、このことは十二分に認識されているのであって、その証
拠に、本巻中の中野教授の論文は、あたかもリカアドウにみら
れる実践と理論との交渉関係を浮彫にしようとの意図の結果で
あるのである。豊崎教授は経済学史は経済学の補助学科である
といわれるが、その補助の意味はさまざまでありうる。そして
実はそのある限定された意味において、われわれもつねにこの
主張をおこなっているものである。(たとえば『社会科学入門』
(みすず書房・昭和三十一年)中の拙稿「経済学史」をみよ。)
又経済学史は現代経済学の理論を以てでないと研究できぬとの
ことであるが、この主張にもさまざまな意義があるのであつ
て、教授の主張にもっと精密な展開がないと、百も承知の理論
のようにも、思えてくる。のみならず、経済学の歴史叙述を可
能にするものが理論であると同時に、その理論そのものが歴史
の中で生まれ、歴史によって規定されるものでもあることに、

わが批判者の注意をうながしたい。総じてわが批判者は、歴史といえはそれを「書かれた歴史」と解し、「出来ごととしての歴史」の側面には、注意がゆきとどいていないかのごとくである。第三に、豊崎教授の考えでは、マルクス経済学も近代経済学も同じ程度に批判の対象となる。しかしわが国では、マルクス経済学の立場で経済学史の研究にたずさわっている人は相当にあるが、残念ながら、近代経済学の立場で経済学の歴史的発展に専心している人は全くないというのが実情である。だいたい、近代経済学のなかに歴史意識がどの程度に自覚的に浸透しているかは、問うてみるべき問題であるが、近代経済学の系譜を辿ろうとするかみえる人も、実は、理論研究者の余技ないし副産物として研究を行なっているのであって、真に歴史的な研究というべきものにはなっていない。だから近代経済学をマルクス経済学と同じ程度に同一の批判の対象とすることは、これまた粗大のそしりはまぬがれないであろう。（この点で、豊崎教授はわが国の経済学の一般に対していだかれる批判をば、学史研究者にしわ寄せられた感がふかい。）

四

以上は、この記念論文集の各論文を努力して精読したのちのいつわらざる感想である。執筆者各位に非礼を敢えてしたかも知れぬ。おゆるしを請うのみである。

堀経夫博士還暦記念論文集をよんで

最後に、全体を通じての感想をもあわせて記しておきたいと思う。

豊崎教授の批判には相当の不満を感じないわけにはゆかぬわたくしではあるが、実は、同感すべきものも、わが国の経済学史上の論作に対して、多くもっているのである。わが国のこの種の研究のもつ欠陥とひずみを左に列挙してみよう。第一には、旧態依然として紹介を以てこと足れりとする態度がみられることである。第二には、問題意識の稀薄さである。第三に、たとえ問題意識があっても、それを客観的な形であらわにするのでなくて、主観的な要求としてのみ表明し、研究はその主観的な要求をみたす趣味であるが如くにおこなわれることである。最近、吉田洋一氏の翻訳によって、ミーク教授の論文がわれわれに近いものになったが（未来社、社会科学セミナー、ミーク『イギリス古典経済学研究』）これとわが国の論文とを比べるととき、そのことを痛感するものである。問題意識の主観性は客観的な問題の提出にまで具体化されなくてはならないだろう。第四に、日本人のかく論文は難解にすぎるといふことである。内容自身がむつかしいというよりも、表現に無駄が多いか、いたずらにカイジユウであるかのために、明セキではなくなっているのである。この巻における執筆者にもまた、この点のあてはまるものが多かった。われわれは、表現を適確簡明にする努力を、もっともっと積み重ねばなるまい。わが国の経済学

界のデカルトの出現を待望するものである。第五に、これと関連することであるが、日本人の論文には、不必要に長大な引用文が多すぎるといふことである。思うに、長大な引用が必要であるのはつぎの二つのばあいである。原本が一般の研究者の手に入りにくいときがその一つ。そして、原本が入手できるとしても、特徴ある思想を独特の用語と文体で発表していて、読者にその趣きをつたえる必要があると思えるときがその二つ。それ以外のばあいには、注で引用箇所を明示しておけば、研究論

文としては十分なのであるまいか。われわれは、自分自身の推論のために多くのことばをのこすために、他人のことばを割愛する——歪曲せよというのではない——の労をとるべきである。論文の四分の一から三分の一の長さにも及ぶ引用句を日本の訳本からかきうつすことが、執筆者には不必要な手間であり、読者へは迷惑になることを、われわれは反省してみるべきであらう。

(一九五六、一一、三〇)

執筆者紹介 (掲載順)

豊崎 稔	京都大学教授
吉村 達次	京都大学助教授
前川 嘉一	京都大学助教授
降旗 武彦	京都大学講師
高 昇 孝	京都大学大学院学生
崎 山 一雄	京都大学大学院学生
出口 勇 蔵	京都大学教授